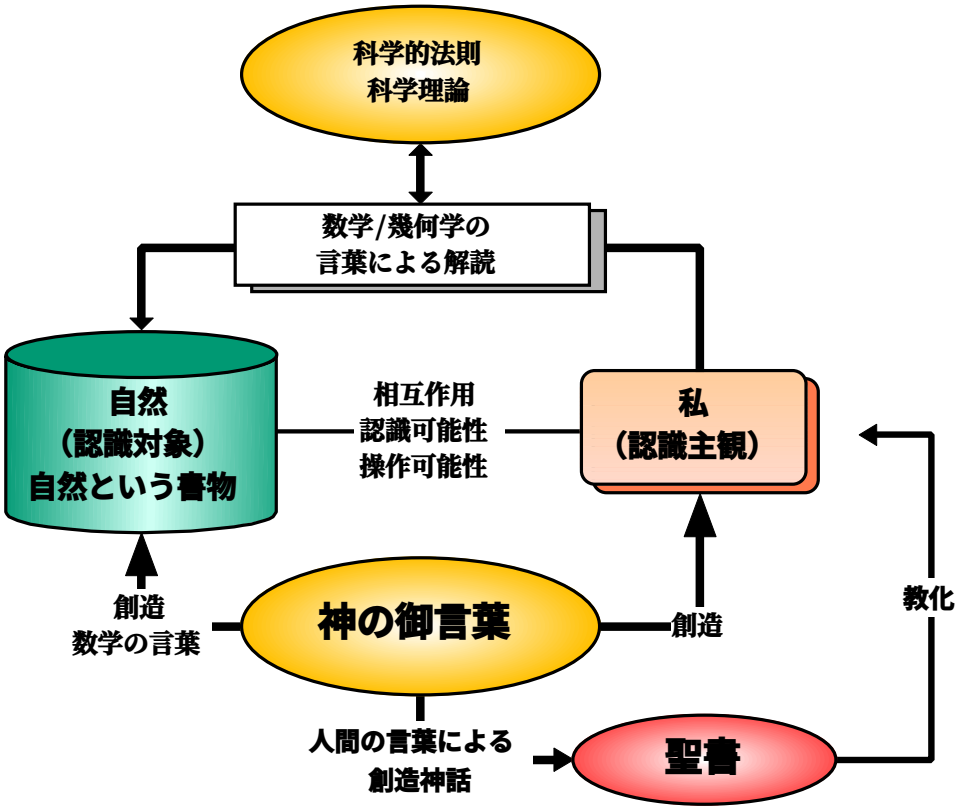
観念論と唯物論に共通する《イデアリスム》の構造

「観念論」の場合：神＝観念・精神であり、「唯物論」の場合：神＝物質である。



観念論的認識論のストラクチャー

1）「私（＝認識主観）」は「自然（＝認識対象＝実在対象）」を「正しく」認識し、その真理を領有することができる。

2）なぜなら、「認識主観の私」も「認識対象の自然」も共に「神の御言葉」によって創成されたものであるから。どちらも「神による創造物」であるということが、「私」による「実在対象」の認識の「真理性」を究極的に保証するのである。

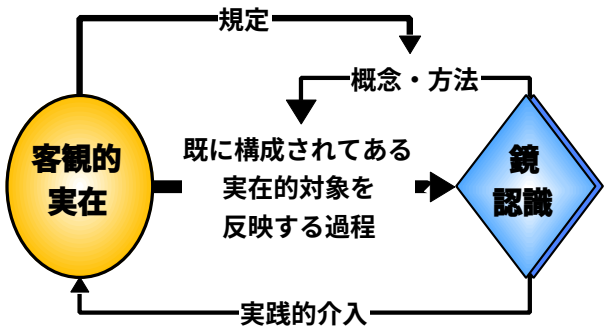
3）「神」は、その御言葉によって世界の初期条件とスクリプトを与えることによって世界（実在世界）を創造する。

4）世界（実在世界）を理解する（＝認識する）ということは、「神」が語る御言葉を聴き取り（読み取り）、理解することにほかならない。神の御言葉を聞き取る（＝読み取る）場所は、「聖書」と「自然」である。

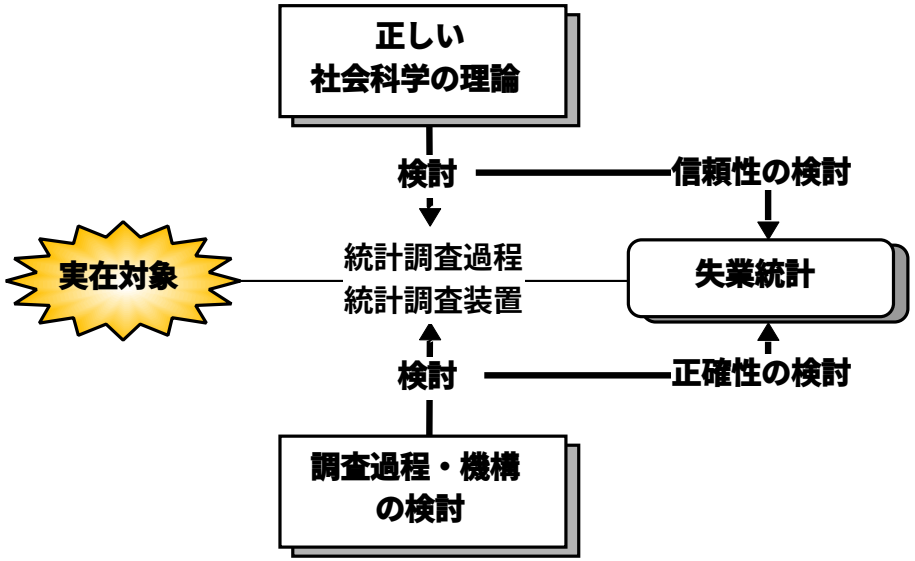
5）「聖書」は神が人間に理解できる言葉で世界の創造・成り立ち・人間の生き方について書いた書物である。

6）同様に「自然」は、神の御言葉が書き込まれた偉大なる書物であるが、それを読むには、神がどのような言葉を語っているのかを知らなければならない。ガリレオ・ガリレイは、その言葉は「数学と幾何学の言葉」で書かれていると言った。「弁証法的唯物論者」は「唯物弁証法」の言葉で書かれていると言った（？）。

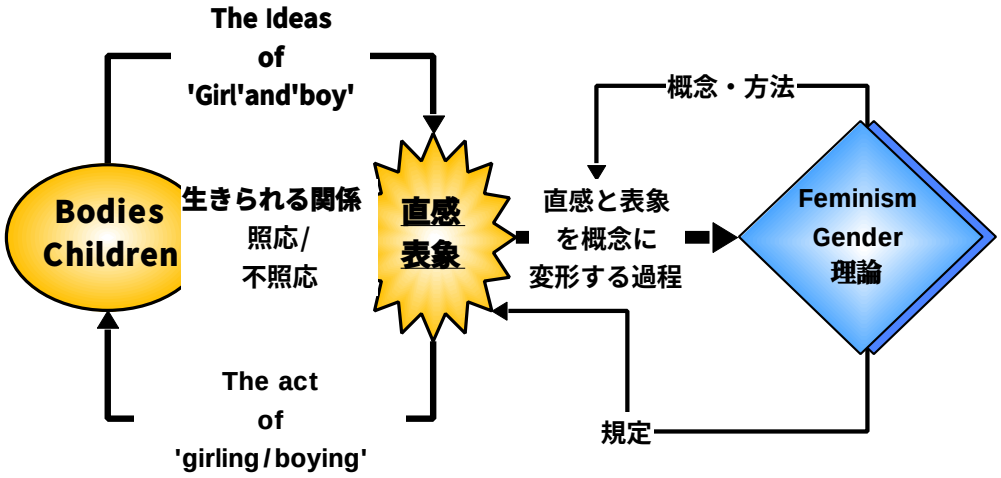
認識「生産」の理論：対象反映論的モデル



「統計の対象反映論」に基づく統計資料の検討モデル

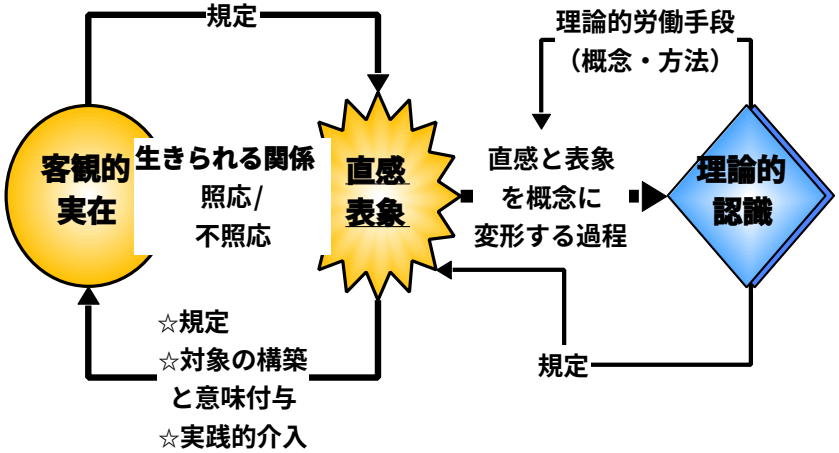


Judith Butler, *Bodies That Matter*, Routledge,1993
の論議にマルクス・モデルを適用してみる：

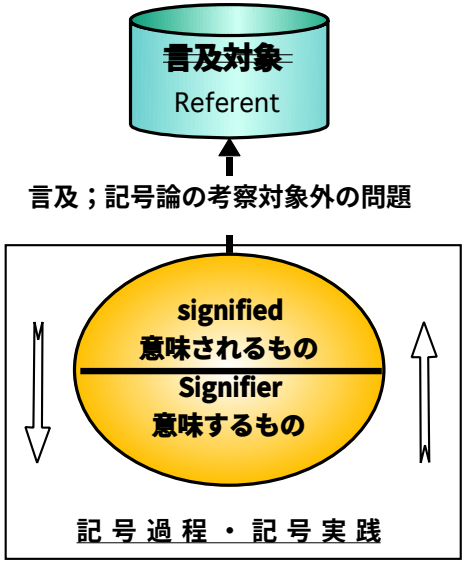


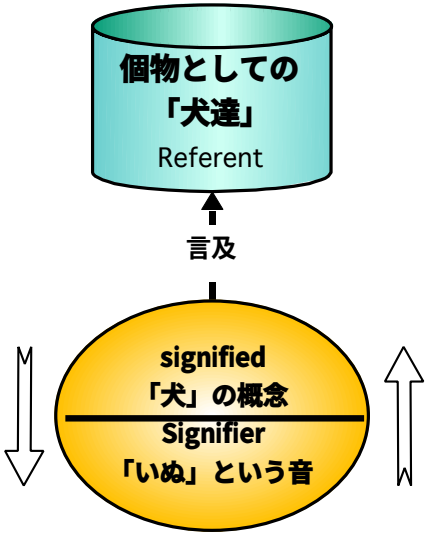
Babies を「女の子/男の子」として「統治 governing」し、「規制regulate」 する。

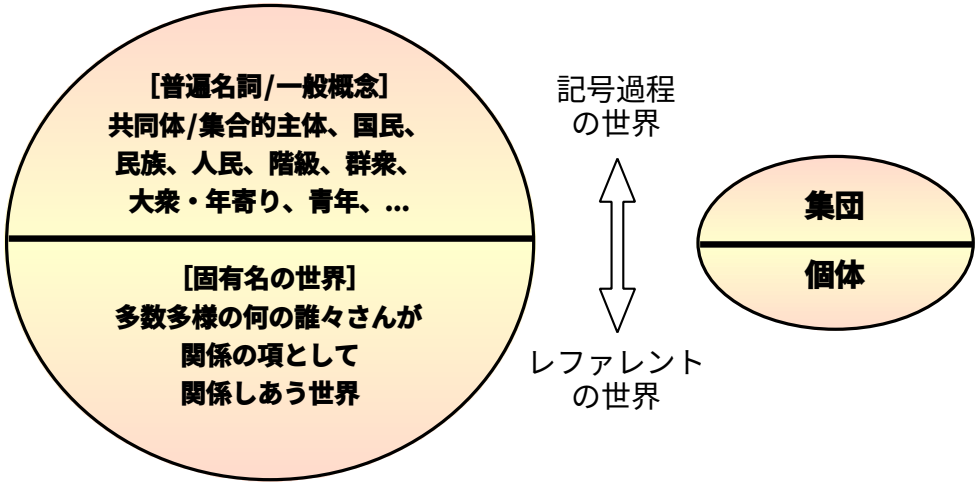
認識生産の理論：マルクス・モデル



記号論的・言語論的（ソシュール）モデル







例題：「赤色のカードを（集め）調べる。」

操作：１）検索対象のカード（集団）の範囲を確定する。

２）「赤色」（属性）の操作可能な定義付けをする。ここで重要なことは、「赤色」の操作可能な定義づけなしに「赤色」のカードなどどこにも存在しないことだ。

３）検索対象のカードから赤色のカードを抽出する（サブ集団の構成：検索結果が０ないし１ケースしかない場合もある）。ここで重要なことは、カードが「色」という属性を持つと想定され、実際そのような「反応/観察」をカードが返す（「属性」として持っている）限りにおいて、この操作は可能になるということだ。この意味で、「色/赤色」という概念は実在すると主張する「実在論」のテーゼが可能となる。

４）抽出されたカードを調べる。ここで重要なことは、対象として設定された実在＝カードは、常に「赤色」の操作可能な定義による支配から逃れ（ズレ）続けるということだ（これが実在は物質性を持つということの意味である：反ヘーゲル）。実在のカードの連続的に変化する「色相（光のスペクトル）」のどこからどこまでを「赤色」とするのかは、如何に厳密に操作可能な定義を与えようとも「曖昧なもの」であり、境界は常に不在である。実在は観念による（観念による対象規定による）実在の支配を覆し続ける。しかし、ここで重要なことは、一度、上述の一連の操作が作動し社会的に制度化され歴史化されるならば、「赤色のカード」（＝赤の社会集団）という社会集団が社会的に歴史的に実在の集団として認知/否認され、立ち現れるということである。その集団は、「観念によって規定されたもの」とは常に「ズレ」た不在の存在であり続けるとしても。国民・民族・階級という観念・概念の成立と国民’民族・階級という（追及していくとその実体・実態が不明になってしまう）実体の成立。